

都道府県名： 宮崎県

報告部署： 農政水産部営農支援課

**【地域の概要及び取組の背景】**

近年、配合飼料の主な原料であるとうもろこし価格の上昇に伴い配合飼料価格が上昇し、畜産経営に大きな影響を及ぼしている。

その対応策のひとつとして、本県では、飼料用米の導入を検討し、平成20年度に1カ所50ヘクタール規模の実証ほをはじめ、県内各地に実証ほを設置した。この実証ほにおいて、各関係機関分担して栽培試験・給与試験・流通試験等に取り組み農家への普及に向けた基礎データを収集することとした。

農林振興局（農業改良普及センター）は、導入品種の検討のための品種比較試験と低コスト栽培技術確立試験を担当した。

**【取組の具体的な内容・成果】****1 取組の概要**

県下に、飼料用米を試験的に約74ヘクタール導入し、各農林振興局において品種選定及び低コスト栽培のための実証ほを設置した。

**1) 各農林振興局の実証課題及び面積****①飼料用米品種適応性試験**

実施振興局：中部（普通期栽培：20a）、児湯（早期栽培：27a）

**②低コスト栽培実証**

実施振興局：南那珂（13.0a）、北諸県（7.0a）、東臼杵（2.0a）

**2 特筆すべき取組内容****(1) 非主食用米の低コスト多収生産に向けた栽培技術等の実証****1) 飼料用米品種適応性試験（農試で実証したデータを含む）**

上記振興局と試験場において、9品種の試験を実施し、収量は300kg台から800kg台とばらつきがあった。代表的な飼料用米品種の本県での主な栽培特性は下記のとおりである。

**○品種特性****①北陸193号：収量670～820kg/10a**

栽培上の特徴：収量が多い。倒伏に強い。

栽培上の欠点：休眠が深く発芽勢が悪い。成熟時に脱粒しやすい。成熟期が長い。

**②モミロマン（関東飼226号）：収量506～869kg/10a**

栽培上の特徴：倒伏に強い。脱粒性が難。

栽培上の欠点：多収性だが成熟期間が長いいため、遅植えの場合、登熟不良となり初摺歩合が低い。

**③南海141号：収量552～822kg/10a（本県育種）**

栽培上の特徴：収量が多い。倒伏に強い。脱粒性が難。

栽培上の欠点：ややいもち病に弱い。

**④ホシアオバ：収量330～743kg/10a**

栽培上の特徴：草丈が高くホールクropp向き

栽培上の欠点：穂数が少なく収量にばらつき有り。穂発芽しやすい。

**⑤べこごのみ：収量393～420kg/10a**

栽培上の特徴：早生品種（2回刈りや2期作品種としての期待）

栽培上の欠点：収量が低い。耐冷性が低いため不稔が多い。食用との識別が困難。

※今年度の栽培実証試験から来年の実証は「モミロマン」を中心に実施する予定。

**2) 低コスト栽培実証（南那珂、北諸県、東臼杵）**

直播栽培（乾田、湛水、鉄コーティング）及び立毛乾燥技術の実証。

**①直播適性について**

・北陸193号およびモミロマンとも直播適性が高い。（623kg～667kg/10a）

・ホシアオバについては、収量性に課題がある。（350kg程度）

・漏水・雑草対策等の課題がクリアできれば、乾田直播栽培の方が効率的である。

**②立毛乾燥技術について**

・成熟期段階では20%程度の水分であるが、その後晴天が続けば7日程度で15%程度までさがる。

## 【今後の予定】

- ・総合農業試験場及び現地での品種比較試験の結果、21年度より「モミロマン」を推進することになった。
- ・21年度の栽培面積は未定であるが、「モミロマン」等の種子は200ha分を確保している。
- ・各普及センター、総合農試、畜産試験場においても、20年度同様の栽培面積及び給与試験を実施する。

## 【課題等】

### 1) 経営面

- ① 乾籾1kg当たり30円と価格が安いので所得が低い。  
また、今年は籾出荷であったが、通常は乾燥籾摺で41円/kgの経費が掛かるため、助成金等による継続的な支援が必要である。
- ② 飼料イネより、収穫・乾燥にコストが掛かる。
- ③ 主食用米に比べ一株当たりの分けつ数が多いため、コンバインの消耗が激しい。  
また、コンタミ防止のために専用コンバインが必要。
- ④ 乾燥施設でコンタミ対策が必要なため清掃コストが掛かる。  
また、一時的な保管施設の整備が必要である。
- ⑤ 効率的な作業を進める上では団地化が必要であるが、出作入作等により現段階での大規模な団地化は困難。

### 2) 栽培面

- ① コンタミ防止のため、主食用米と栽培時期をずらす必要があるが、品種毎に適期の水管理ができず収穫量が少ない。
- ② 飼料米は、防除をしない場合が多いため、栽培圃場が病害虫（カメムシ、ウンカ等）の発生源となる可能性がある。
- ③ 省力・低コストの多収穫技術が確立していない（飼料作物感覚での栽培では困難）。
- ④ 肥料高騰対策のため、たい肥の活用が必要であるが、安価なたい肥の確保が困難な地域も多い。